様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　31 日現在

機関番号：13201
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：平成 20 年度～平成 23 年度
課題番号：20730442
研究課題名（和文）　高齢者における適応的な依存の在り方の検討

研究課題名（英文）　Study of adaptive dependence among elderly

研究代表者
竹澤　みどり（Midori Takezawa）
富山大学・保健管理センター・講師
研究者番号：90400655

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、加齢に伴う心身機能の低下のため、日常生活を自身の力のみでは維持することが困難となった高齢者における適応的な依存の在り方を明らかにすることであった。まず、特にホーム・ヘルパーへの依存に焦点を当てた面接調査を行い、その依存構造に関する仮説的モデルを作成した。次に、このモデルを基に、依存の規定因（ホーム・ヘルパーの介護態度、高齢者の対人特性）および依存と高齢者の介護満足度・主観的幸福感との関連を質問紙調査によって検討した。さらに面接調査を行い、依存と自立のバランスに焦点を当て、加齢に伴う依存の増加への適応過程についても検討を行った。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to explore adaptive dependence among the elderly who, because of a decline in their mind and body functions, cannot do daily activities without help. Focusing especially on the dependence on Home-Helpers, one interview survey was conducted to develop a hypothetical model of dependence structure. Based on this model, questionnaire surveys were conducted to examine those determinants (the home-helper's caring attitude and the elderly's interpersonal traits) and the relation between care satisfaction and subjective well-being to elderly's dependence. Finally, another interview survey was conducted to examine the process that the elderly use to adapt to their increasing dependency on others in terms of a balance between dependence and independence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：健康心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：対人依存・高齢者・在宅介護・自立

１．研究開始当初の背景

日本の高齢化はめざましく，総人口に占める 65 歳以上の割合は年々増加し，今後も増加し続けることが予想されている。その一方で，高齢者のみの世帯数が増加し，以前に比べて「家族なのだから，面倒をかけても当たり前」と考える人が減少し，「できるだけ家族に迷惑をかけたくない」という人が増えてきつつある。その結果，家族に遠慮するあまり悲劇的な生活を強いられている人も少なくないという（老年問題実践家研究会, 1996)。さらに，孤独死や高齢者虐待の増加など，高齢者の置かれた現状は厳しい状況にあるといえ，高齢者が自己の存在価値や充実感を持ち，幸福に生活することができる環境を形成することが急務であると言える。

高齢者は加齢に伴う心身機能の低下等のため、日常生活を自身の力のみでは維持することが困難となる場合が多く，結果として身体的な依存性を増大させる。さらに，職場や労働市場からの阻害，年金への依存，社会的役割の喪失といった経済･社会的側面での依存性の増大は，同時に自己の存在価値や自尊心の喪失といった心理的な側面での問題も生じさせる。また，リタイヤ後に社会的活動に参加する割合が減る一方で，新しい人間関係を結ぶ機会は極めて少なく（竹中, 1998)，その結果社会的ネットワークが縮小していき，高齢者の孤立化がすすむ傾向にある。また，高齢者に対してはできるだけ自立した生活をすることが求められ（杉井，2002)，積極的に他者に依存しにくい環境にあるといえる。そのような中で，高齢者は他者から援助が得られない状況でじっと耐えたり，援助を待つよりも，自尊心や自己価値感が傷つかないような適応的なやり方で他者に依存し，周囲も高齢者が適切なやり方で依存できるよう援助することが重要であると考えられる。

しかし，従来の心理学における高齢者の依存性研究では，主に身体的依存に焦点を当て様々な機能障害におけるケアへの依存の様相や依存と自立の葛藤がもたらす影響などが検討されているのみである。高齢者における依存の適応的な在り方やそれを可能にする周囲の対応についてはこれまで系統的な研究がなされてきておらず，具体的な方策も含めた結論を導き出すための知見の蓄積は不十分であり，今後の研究が必要であると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は，加齢に伴う心身機能の低下等のため，日常生活を自身の力のみでは維持することが困難となった高齢者における適応的な依存の在り方を検討することであった。具体的には、以下の３つの研究を行った。

研究１
在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパー（以下、ヘルパー）へのより適応的な依存の在り方、さらに、それを取り巻く規定因等も含めた仮説的なモデルを得ることであった。

研究２
以下の二つの点に関して、研究１によって得られたモデルを数量的研究によって実証することが目的であった。
（１）一つは、依存の規定因の検討である。初年度の知見をもとに、ヘルパーの性格として「ヘルパーの介護態度」および高齢者の性格として「対人関係に関する特性」について検討した。
（２）もう一つは、初年度で見出した高齢者の適応的な依存が、果たして適応的と言えるのかを実証するために、介護にかかわる様々な満足感や主観的幸福感にどのような違いをもたらすのかを検討することであった。

研究３
研究１で示唆された適応的な依存の在り方の一要素である「依存と自立のバランス」に焦点を当てる。加齢に伴い他者への依存が増える中、依存と自立の葛藤や他者へ依存しなければならないことによる負担感も増えていく。そこで、どのように依存と自立のバランスを取っているのか、依存の増大からくる負担感にどのように対処しているのかを明らかにすることが目的であった。依存と自立のバランスを考える際には、高齢者の生活全体における様々な依存対象への依存を包括的に考慮する必要があると考えられた。そのため、研究３においては依存対象を特に限定しないこととした。

３．研究の方法

全ての調査における調査対象者は在宅で生活する 65 歳以上の要介護（または要支援）

認定を受けた高齢者であった。研究１～２においては、依存対象を担当ホーム・ヘルパーに限定して調査を行った。

研究１

特に、担当ケア・マネージャーがヘルパーの利用に順応していると思われた高齢者を対象として、半構造化面接調査を行った。具体的な質問内容は、「ヘルパーにお願いすることやその仕方」、「嫌だな･困ったなと思ったことやそれに対する自身の対応」、「ヘルパーとのやり取りの仕方や心がけていること」などであった。

研究２

在宅要介護（または支援）高齢者を対象として、２回の質問紙調査を行った。調査内容は、年齢・性別・要介護（または支援）度・家族構成に加えて、以下の質問紙を用いた。1 回目の調査では、研究 1 を基に独自に作成した「在宅要介護高齢者のヘルパーへの依存尺度」（以下、「依存尺度」）・「在宅要介護高齢者の自立尺度」（以下、「自立尺度」）・「在宅要介護高齢者のヘルパー活用の工夫」（以下、「工夫尺度」）、さらに「訪問介護利用者評価尺度」（須賀、2003）・「（訪問介護に対する）総合満足度」（須賀、2003）・「PGC モラールスケール」（古谷野、1996）を用いた。2 回目の調査では、「依存尺度」・「自立尺度」に加え、「対人関係性尺度」（高井、1999）・「ヘルパーとの関係満足度」（伊藤・相良・池田、2006 を基に作成）であった。

研究３

研究１で行った面接調査における対象者に再度調査依頼を行い、了承が得られた人に再度半構造化面接調査を行った。具体的な質問内容は、「前回の調査時からの変化」「自立して行っている活動」「ヘルパー以外の人とのかかわり」「他者に依存していること」「自立するにあたって困難な面」「依存するにあたって困難な面」などであった。本調査では、依存対象は限定していない。

４．研究成果

研究１

面接内容を修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（木下、2003）によって分析し、結果図を作成した（Fig.1）。

高齢者のヘルパーへの依存には主体的能動的な依存（「能動的依存」）と，ヘルパーからの提案による受動的選択的な依存（「受動的・選択的依存」）の 2 種類が見出され，「能動的依存」の不足部分に対して「受動的・選択的依存」が補足的に機能していると考えられた。このことから、高齢者の身体・認知機能に応じて両者のバランスが取れていることが、より適応的な依存の在り方であることが示唆された。

一方で、「できるところは自分で行う」という自立的な活動も積極的に行っていた。全てを他者に依存しているのではなく、できるところは自分でも行っているという感覚が、ヘルパーへ頼ることの抵抗感を和らげていることがうかがえた。また、ヘルパーに一部を依存することで初めて可能となる自立も多く存在した。したがって、依存と自立は対立するものとして存在しているのではなく、両者が捕捉しあいながらバランスを取りながら共存することが重要であると考えられた。

依存の規定因としては，ヘルパー制度による制限や家族の介護への関与、ヘルパーを利用する際のデメリットなど複数の要因が高齢者の依存に対して抑制的に働いていた。逆に、体力や能力の衰えやヘルパーとのコミュニケーションは促進的に働いていた。ヘルパーや高齢者の性格によっては依存に対して抑制的にも促進的にも働いていた。これらのうち依存行動に対して抑制的な影響を与える要因は，逆に「できるところは自分で行う」といった自立的行動の促進につながることが見出された。

また，高齢者がヘルパーへの依存やヘルパーとの関係性をより機能的なものとするために，自身の要望をはっきりと主張したり，ヘルパーが援助しやすいようにできるところはあらかじめ準備をしたり，ヘルパーが快適に仕事ができるように気を使ったり、ヘルパーの提供する援助を受け入れ、自身を委ねるといった工夫をしていることが見出された。このような工夫が効果的な依存行動や自立的な行動につながることが示唆された。

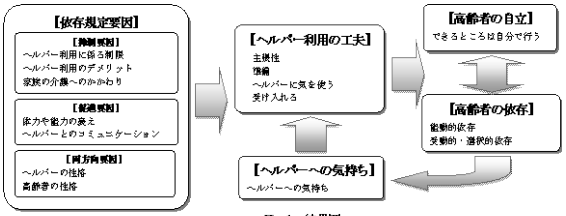

Fig.1 結果図

研究２

まず、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存を測定する尺度（「依存尺度」）、在宅要介護高齢者の自立を測定する尺度（「自立尺度」）、在宅要介護高齢者のヘルパー活用の工夫を測定する尺度（「工夫尺度」）をそれぞれ作成した。分析の結果、依存尺度は、ヘルパーが必要と判断した援助の提供を提案し、高齢者が必要であると判断したときにそれを受け入れるという「受動的・選択的依存」、高齢者が主体的にヘルパーに要望を伝えて依存する「能動的依存」の二つの下位尺度から成り、それぞれ信頼性が確認された。

自立尺度については、一次元性及び信頼性が確認された。工夫尺度は、ヘルパーが仕事をしやすいように自分でできるところはあらかじめ準備をしておくという「準備」、自分の思うようにいかない場合には妥協や我慢をしたり、ヘルパーに気を使うなどのヘルパーに対する「抑制的な態度」、ヘルパーに気を使いながらも自身の要望をきちんと主張するなどといった「積極的な態度」の３つの下位尺度からなり、それぞれ信頼性が確認された。さらに、各変数間の関連を検討した結果、本研究では依存の両下位尺度と自立尺度との間に有意な正の相関がみられた。このことから、本研究で取り上げた依存と自立は対極概念ではなく、自立的な行動をしている人は、必要なときにはヘルパーに能動的に依存し、ヘルパーからも必要な援助がよく提案されていると感じていることが明らかとなった。また、工夫尺度の下位尺度「抑制的な態度」「積極的な態度」は概念的には対極に位置する概念と考えられるが、両者の間にも有意な正の相関がみられた。抑制的な態度を多く示す人は積極的な態度を示さないということではなく、抑制的態度と積極的態度が共存し、高齢者が場面によって使い分けていることが推測された。これらの結果は、研究 1 で得られた結果を支持するものであった。

（１）規定因の検討

研究１で作成した仮説的モデルにおける規定因のうち依存行動に抑制的にも促進的にも働く「両方向要因」について検討を行った。まず援助者側の要因である「ヘルパーの性格」についてである。高齢者はヘルパーの介護態度をもとに性格を推測していると考えられ、今回は特にヘルパーの介護態度に焦点を当てて検討した。その結果、基本的な態度ができており、高齢者の意向をくみ取ることのできてるヘルパーに対しては、高齢者は依存を能動的に表出しやすく、ヘルパーからの援助の提案も多くなされていると感じていることが明らかとなった。また、そのようなヘルパーに対しては、自身の意思や要望を主体的に伝えることが多く、そうでない場合には我慢したり妥協したりすることが多くなることが明らかとなった。以上より、援助者側の介護態度によって依存のしやすさが異なることから、高齢者が負担なく援助者に依存するためには援助者が基本的な態度ができており、高齢者の意向をくみ取ることができることが必要であるといえる。

次に、高齢者側の要因である「高齢者の性格」として特に対人関係に関する特性について検討した。その結果、人に対して心を閉ざす傾向にあったり、傷つきを恐れて人前で自分の意見を言うことを避けようとする傾向の高い人は能動的に依存しにくいことが明らかとなった。また、人の世話をすることを楽しいと感じたり、相手の良いところも悪いところもありのままに受け入れられる傾向の高い人は能動的に依存しやすいことが明らかとなった。したがって、能動的に依存しにくい高齢者には積極的に援助の提案を行っていくといった高齢者の対人特性に合わせた対応が必要であるといえる。

（２）介護に関する満足感・主観的幸福感との関連

ヘルパーへの依存によって、ヘルパーや介護にかかわる満足感や主観的幸福感にどのような違いをもたらすのかを検討した。その結果、より能動的に依存を表出する高齢者は、ヘルパーの仕事への満足感が高かった。また、よりヘルパーから必要な援助が提供されていると感じている高齢者は、ヘルパーの仕事及びヘルパーとの関係性にもより高い満足感を感じていた。また、主観的幸福感に関しては、独居の高齢者においてのみヘルパーから必要な援助を提供されていると感じている高齢者のほうが主観的幸福感が高かった。能動的依存および家族と同居している場合には有意な差は見られなかった。以上より、必要なときには能動的に援助者に依存できることは、介護に対する満足感を高めるという点で、適応的な依存の在り方の一つといえるだろう。

研究３

面接内容を修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（木下、2003）によって分析し、結果図を作成した（Fig.2）。

対象者は年を経るにつれ＜家族・介護専門職への依存＞が増えていく中で、自分ではできないことを他者に依存しながらもできる部分は、一部は他者の援助を借りつつも自身で行うという＜部分的自立＞を行っていた。また、デイケアでの仲間やスタッフ、家族等といった＜他者とのかかわり＞を通して、他者の役に立ったり、他者を喜ばせたりといった＜他者のための行動＞を行っていた。これによって、自身が一方的に他者に依存するだけの存在ではなく、他者に頼られる、役に立つ存在であるということを実感することができると考えられた。したがって、＜他者のための行動＞は自立行動ではないが、他者への依存の増大からくる負担感を相殺しうる行動であると推測された。つまり、＜部分的自立＞だけではなく＜他者のための行動＞を行うことでも依存とのバランスを取っていると考えられた。

さらに、日常の活動等に積極的に楽しみを見つけたり、自身の行動に対して積極的な意味づけを行うといった対象者の＜積極的な心がけ＞が、＜部分的自立＞を行う動機づけ

を高めていた。

しかし、<部分的自立>や<他者のための行動>だけでは、依存の増大とのバランスを取ることが難しい場合も多く、依存が増大している自身の状況を割り切って受け入れるという「割り切り的対処」を行っていた。さらに、依存対象への「感謝の気持ち」を感じたり、示すことも依存の増大からくる負担感への対処となっていると考えられた。

以上より、他者からの介護を必要とする高齢者においては、自身が他者の役に立つと実感できる行動や自立的な行動だけでは他者への依存の増大からくる負担に対処することは年々難しくなり、現在の自身の状況を割り切って、受け入れるといった対処の仕方が次第に増えていくことが推測された。

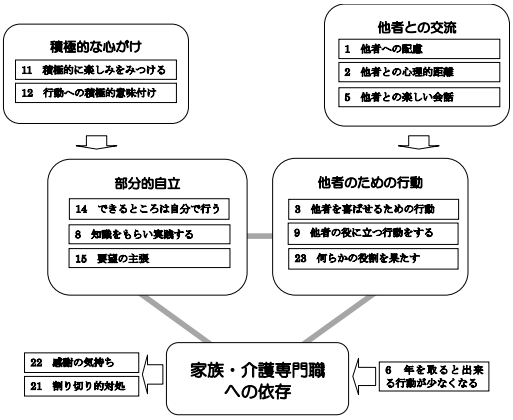

Fig.1 結果図

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存（第２報）：介護満足度および幸福感との関連、学園の臨床研究、11、47-51、2012、査読無し

②竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存と自立（第 1 報）：ホーム・ヘルパーの介護態度との関連、学園の臨床研究、10、67-74、2011、査読無し

③竹澤みどり、在宅要介護高齢者とホーム・ヘルパー間の依存と自立の構造―修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から―、ヒューマン・ケア研究、11、70-85、2010、査読有り

〔学会発表〕（計４件）

①竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存（３）―ホーム・ヘルパーの仕事への満足感，主観的幸福感との関連から―、日本ヒューマン・ケア心理学会、2011 年 7 月 23 日、大阪市立大学

②竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパー活用の工夫―ホーム・ヘルパーの態度との関連から、日本健康心理学会、2010 年 9 月 12 日、江戸川大学

③竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存と自立―ホーム・ヘルパーの態度との関連から―、日本ヒューマン・ケア心理学会、2010 年 7 月 18 日、日本赤十字大学

④竹澤みどり、在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存構造―面接調査から―、日本健康心理学会、2009 年 9 月 8 日、玉川大学

６．研究組織

(1)研究代表者

竹澤　みどり（TAKEZAWA MIDORI）
富山大学・保健管理センター・講師
研究者番号：90400655